■ 川本喜八郎 プロフィール

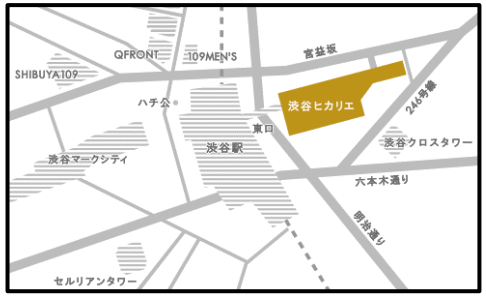
1925年：1月11日渋谷区千駄ヶ谷に生まれる
1946年：東宝映画撮影所美術部勤務
1951年：飯沢匡に見いだされ人形絵本、ＣＭ製作などを始める
1963年：チェコ・プラハに留学、人形アニメの巨匠イジィ・トルンカに師事
1968年：「花折り」をはじめ、「鬼」（72）、「道成寺」（76）、「火宅」（79）など、人形アニメーション映画を発表

1982年：NHK人形劇「三国志」人形美術担当
1988年：日中合作人形アニメーション「不射之射」監督
1990年：日本チェコ合作人形アニメーション「いばら姫またはねむり姫」監督
1993年：ＮＨＫ人形歴史スペクタクル「平家物語」人形美術担当
1995年：日本アニメーション協会会長就任
2003年：連句アニメーション「冬の日」監督
2005年：人形アニメーション「死者の書」監督
2007年：長野県飯田市に川本喜八郎人形美術館オープン、館長就任
2010年：8月23日逝去
2012年：6月4日渋谷ヒカリエ８階川本喜八郎人形ギャラリーオープン

■ 川本喜八郎 人形ギャラリー

川本喜八郎（1925～2010）は、渋谷区千駄ヶ谷に生まれ育ち、人形美術家・アニメーション 作家としてＮＨＫ人形劇「三国志」、「平家物語」などを手掛け、世界的にも活躍し、多くのファン を魅了してきました。渋谷区では芸術や文化を、気軽に身近で楽しむアートスポットとして、川本喜八郎の生み出した人形をテーマごとに常設展示しています。

◆入 館 料　無料　　◆開館時間 午前11時～午後7時
◆休 館 日　無休（ただし年末年始、展示入替期間は除く）
◆所 在 地　渋谷区渋谷二丁目21-1　渋谷ヒカリエ8階
◆アクセス
　東急東横線・田園都市線、
　東京メトロ半蔵門線・副都心線
　「渋谷駅」15番出口直結。
　ＪＲ線、東京メトロ銀座線、
　京王井の頭線「渋谷駅」と
　2Ｆ連絡通路で直結。
◆問　渋谷区文化振興課交流推進係
　☎03-3463-1142 ※平日8：30～17：15



編集・発行　渋谷区文化振興課　平成30年7月8日

瓦版 No.11

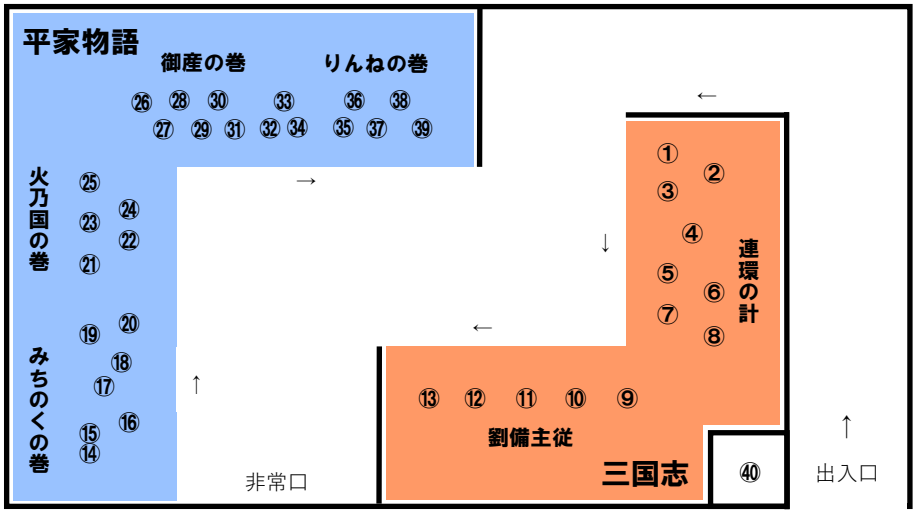
Puppet Master

川本喜八郎 人形ギャラリー

三国志・平家物語

ちがいを ちからに 変える街。 渋谷区 Shibuya City

第12回常設展　展示内容（平成30年7月8日～）



三国志

連環の計

男たちの興亡を描く『三国志演義』開巻直後の第八～九回、絶世の美女貂蝉をめぐるエピソードが物語を彩っている。梟雄董卓を除かんとする王允が、養子の猛将呂布との反目を煽るため、自分が養う歌妓貂蝉（時に十六歳）を使って二人の仲を裂き、呂布の手で董卓を刺殺させた。貂蝉を間に董卓と呂布を鎖のようにつなぐことから、「連環の計」と呼ばれる。董卓のもとに送り込まれた貂蝉は、その心をとらえる一方で呂布の気を引いて嫉妬に狂わせ、それぞれを巧みに操る。董卓の邸内で逢引きしていた二人を見つけて逆上した董卓が、呂布の武器方天戟を奪って挑みかかる「鳳儀亭」は、京劇の名場面として知られる。貂蝉は中国の四大美女の一人に挙げられているが、実は史書にはその名が見当たらず、物語の中では数少ない架空の人物であり、この一段も『演義』のフィクションである。

①李儒（りじゅ）　② 董卓仲頴（とうたくちゅうえい）　③ 貂蝉（ちょうせん）　④呂布奉先（りょふほうせん）　⑤王允子師（おういんししょ）　⑥ 陳宮公台（ちんきゅうこうだい）　⑦ 袁紹本初（えんしょうほんしょ）　⑧許攸子遠（きょゆうしえん）

劉備主従

優秀な人材を適材適所に配置してシステマティックな政治機構を作り、トップダウンで君主権を発動した曹操、父兄二代の後継者として、土着豪族の連合体という性格の強かった孫権。彼らに対して、裸一貫から乱世に打って出た劉備は、関羽・張飛・趙雲らと同志として結ばれ、いわば血族的性格が強い主従関係を特長としていたが、それは劉備の人間的魅力に起因するところが大きい。その一心同体の関係は終始変わることはなく、劣勢ながら、最終的に鼎の一足をなすことができた。劉備政権は、成長の段階によって変容していく。流浪の時代からつき従う関羽・張飛・趙雲ら、亡命中の荊州で登用した諸葛亮（孔明）らの人士、益州を手中にして蜀の君主となってから登用した旧主の家臣たち、最終的にはこの三者の混合体であった。彼ら家臣団の融和に腐心したのは、他ならぬ諸葛亮であった。

⑨関平（かんぺい）　⑩関羽雲長（かんううんちょう）　⑪劉備玄徳（りゅうびげんとく）　⑫張飛翼徳（ちょうひよくとく）　⑬ 趙雲子龍（ちょううんしりょう）

展示アドバイザーのひとくちメモ

川本先生は布にも相当のこだわりを持っていらっしゃいました。古布屋さんに足しげく通い、京都や中国などへも赴き、時には型染めを特注することもありました。優雅、高貴、人徳、聡明、無骨、狡猾… 人形のイメージに合わせ、個性的だけど奇抜すぎない衣装デザインを先生は心がけていたと思います。そんなこだわりの衣装ですが、今回の平家物語展示では島流しにされた3人（㉜㉝㉞）の衣装には大胆にも破れや汚しなどの加工がされています。三人の置かれた状況や心象などを衣装からも感じ取っていただければと思います。

入り口にアンケート用紙を設置しております。皆さまのご意見、ご感想などお聞かせください。

平家物語

第二部　栄華　みちのくの巻

平治の乱で敗死した源氏の棟梁、源義朝の妻常磐（常盤とも書く）は、今若・乙若・牛若の三人の遺児の助命を命がけで平清盛に嘆願し、その願いは聞き届けられた。末子の牛若は洛北の鞍馬寺に稚児として預けられ、ゆくゆくは僧侶となることになっていた。その牛若丸もすでに十五歳、活発な少年に成長した。鞍馬山中で鎌田正近ら源氏の残党たちに密かに守られ、その生い立ちを知り、己の行く末を考える中で、徐々に源氏再興を悲願とするようになる。母常磐は、再び修羅の道に踏み入れようとする牛若丸の身を案じて出家するようすすめるが、武門の子としての運命を担った牛若丸の意思を変えることはできなかった。そこへ奥州平泉の王者、藤原秀衡の意を受けた金売り吉次が現れる。牛若丸は吉次の手引きで鞍馬を脱出し、奥州へ旅立ってゆく。その途次、熱田で元服し、源義経と名乗る。

⑭⑮牛若丸と 静（うしわかまる しずか）　⑯常磐（ときわ）　⑰牛若丸（うしわかまる）　⑱金売り吉次（かねうり きちじ）　⑲藤原秀衡（ふじわらのひでひら）　⑳鎌田正近（かまた まさちか）

火乃国の巻

平治の乱後に捕えられ、平清盛に一命を救われて伊豆に配流となった源頼朝は、蛭ヶ小島で二十年間、源氏一門を弔う読経の日々を過ごしていた。すでに三十の齢を越え、かつて右兵衛佐の官にあったため、佐殿と呼ばれていた。伊豆の豪族、北条時政の娘政子は、父によって平家党の平（山木判官）兼隆に嫁がされそうになったが、相愛の仲にあった頼朝との駆け落ち同然の恋愛劇によって、頼朝は政子を妻とし、同時に北条氏とのつながりを深めることができた。時勢を冷静に見極めていた頼朝のもとに、後白河法皇の第二皇子、以仁王による平家追討の令旨が届けられるに至って、ひそかに抱きつつあった源氏旗挙げの大望が現実性を帯びる中で、頼朝は関東一円の豪族勢力を結集して決起すべく、計略を練ることとなる。東国武士団のエネルギーが、沸々と勃興し、世を動かしつつあった。

㉑北条宗時（ほうじょうむねとき）　㉒源頼朝（みなもとのよりとも）　㉓北条時政（ほうじょうときまさ）　㉔北条政子（ほうじょうまさこ）　㉕北条義時（ほうじょうよしとき）

第三部　乱　御産の巻

この世の栄華を極める平家の頭上に、やがて暗雲が垂れ込めはじめる。動乱の発端は、安元3年（1177）の「鹿ヶ谷の陰謀」であった。平清盛の専横に不満を持つ院の近臣たちが、都の郊外にある鹿ヶ谷の山荘で密会し、打倒平家を企てたのである。陰謀は粗雑で、露見し未遂に終わったが、その最大の黒幕は、院政をしき「治天の君」として君臨する後白河法皇であった。その一党が次々と処罰される中、俊寛、藤原成経、平康頼の三名は、重罪人として、絶海の孤島「鬼界ヶ島」（鹿児島県）に遠流された。三人は島で望郷の日々を過ごしていたが、清盛の娘で高倉天皇の中宮となっていた徳子の安産祈願のために特赦が行われ、一年後に迎えの船がやってくる。成経と康頼は許されて帰京がかなったが、俊寛だけは謀議の張本人という理由で赦免状にその名がなく、島に一人取り残された。

㉖㉗ 禿（かむろ）　㉘多田行綱（ただのゆきつな）　㉙藤原成親（ふじわらのなりちか）　㉚後白河法皇（ごしらかわほうおう）　㉛西光（さいこう）　㉜藤原成経（ふじわらのなりつね）　㉝ 俊寛（しゅんかん）　㉞平康頼（たいらのやすより）

りんねの巻

吉川英治『新・平家物語』では、この一段は縦横に想像力を発揮して物語設定をふくらませ、ストーリー展開に冴えを見せる。奥州平泉をひそかに発った源九郎義経は、紀州熊野を経て、京の都に現れる。策謀家の叔父行家は、平家の世に揺さぶりをかけるため、息子を偽義経に仕立てて都に火つけ騒ぎを起こし、市中を不安に陥れていた。義経は平家きっての切れ者で、都の治安を預かっていた平時忠のもとに単身乗りこむ。時忠は義経の潔さに心の通うものを感じ取り、彼を厚く遇する一方で、偽義経を捕らえた荒法師、武蔵坊弁慶を利用して義経を討たせようと画策する。こうして、物語の舞台は、有名な五条大橋へと移ってゆく。後年壇ノ浦で平家は滅亡し、立場が全く逆転した義経と時忠は再び出会い、義経と夕花は結ばれるに至るが、先々の物語の複線として、この挿話は光っている。

㉟夕花（ゆうはな）　㊱源義経（みなもとのよしつね）　㊲さめ　㊳武蔵坊弁慶（むさしぼうべんけい）　㊴源行家（みなもとのゆきいえ）

※入口角ケース　㊵文覚（もんがく）

コラム　徹の部屋

昨（2017）年11月20日、渋谷区主催の能楽鑑賞会で、初めて観世流「俊寛」の舞台を観る機会に恵まれました。もちろん出典は「平家物語」（巻二、三）。東山鹿ヶ谷での反平家の密謀が露見して鬼界ヶ島に遠流された俊寛、成経、康頼の三人のうち、俊寛のみが赦免されず、独り絶海の孤島に取り残される悲劇を描いています。作品は俊寛の極限の精神状態を描くことが眼目で、シテは「俊寛」の名を冠した面をつけ、舞を全く伴わず、終始重々しい雰囲気の作品でした。一方、人形浄瑠璃や歌舞伎の「俊寛」では、成経が思いをかける、島の娘千鳥が登場します。歌舞伎では、十七代中村勘三郎が俊寛役者として名高く、現在もしばしば上演されますが、個人的には前進座の中村梅之助の舞台が心に残っています。特に幕切れに俊寛が笑いを浮かべるシーンは、その心理描写を表す独特の演出です。川本先生の「俊寛」の人形を、皆様はどう御覧になるでしょうか。

解説・監修：平井　徹（慶應義塾大学講師）